

2017年(平成29年)1月20日 金曜日

子どもと触れ合う連携授業のバイト生たち。
勉強が終わると一緒に遊ぶ=18日、大分市



「先生、この問題教えて」

宿題のプリントと向き合っ

いた男子児童が顔を上げた。「う

んと、これはね」。大分大学

経済学部1年の宮本健太(20) 。

香川県丸亀市出身 。

が丁寧

が
味く

食卓を囲んで

3 4 5



すみれ学級

毎週月・水・金曜の午後5～8
時、学習支援と食事提供をする。

無料。地域の敷戸小や植田東中の児童・生徒を中心に
20人前後が利用している。☎080・2787・8484。

創刊130周年記念企画

大分大学 × 大分合同新聞社

「先生、この問題教えて」宿題のプリントと向き合っていた男子児童が顔を上げた。「うーんと、これはね」。大分大学経済学部1年の宮本健太(20)は香川県丸亀市出身が丁寧な教えていく。

元業局の一軒家。1階で小学生が問題を解き、2階では中学生が教科書や参考書を広げる。「そろそろご飯よ」。スタップが声を掛けると「あ、この匂い……今日はギョーザや」。

午後6時半前。児童たちは一斉に片付けを始めた。

大分市敷戸西町の子ども食堂「すみれ学級」は、台地に住宅がひしめく敷戸団地の一角にある。昨年8月、調剤薬局を運営する会社「そりりん」(同市)が社会貢献の一環で開いた。

特長は現役大学生による無償の学習指導だ。開設以来、連携授業の1年男女5人がアルバイトで講師を務める。

子ども食堂は地域住民や関係法人・団体が運営するケースが多く、飲食や教育と無縁の企業が取り組むのは珍しい。

「報道などで見聞きしてきた子どもを取り巻く環境に危機感を覚えた。多くの子どもたちに来てもらえるよう学習に力を入れる形にした」。社長の藤井富生(69)は語る。

どのように工夫すれば子どもたちは有意義な時間を送ることができるか。後期の連携授業はこのすみれ学級を舞台に「食堂の理想の過ごし方」を論議、模索している。

受講生30人は晩秋から順番にフィールドワークですみれ学級へ。バイト生と肩を並べて小学生と向き合う一方、県内各地の子ども食堂を視察。地域の現

「幸せ」の居場所 探して



第7部 食卓を囲んで

1 2 3 4 5

「場」で現状と課題を考える日々が続く。

「子どもたちはなぜ来るんだろう。そこから考えてみよう」。毎週水曜の授業では担当の教授陣と一緒に、班別に児童・生徒の態度、興味、背景、活動などの分析を進めてきた。

「アットホームな雰囲気をつくるにはもっと他学年間の交流を増やしたほうがいい」「親を巻き込めないか」

教室は活発な意見が飛び交う。

現場に足を運んで「いま」を知る。五感で情報をつかみ、机の上で知恵を絞る。

なぜ今、子ども食堂なのか。どうすれば利用者も運営者も満足できるか。みんなが「幸せ」になる運営法とは？

すみれ学級の現場責任者、榎田雅文(64)は期待している。「体験で訪れた若者たちの目には運営スタッフが気付かない部分も見えていただろう。思い切った提案をしてほしい」

プレゼンは2月1日だ。

学生は仲間と発想を膨らませながら案を練り込んでいる。

|| 敬称略、第7部終わり ||

この連載は編集局編集委員・首藤康、報道部・菅嶋悠、写真映像センター・鈴木幸一郎が担当しました